
とある魔法少女と不幸な転校生

Hiro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔法少女と不幸な転校生

【Nコード】

N3166Y

【作者名】

H i r o

【あらすじ】

海鳴市にある私立聖祥大附属小学校に一人の転校生が現われた。少年の名前は上条当麻と言った。少女達との出会いは少年に何をもたらすのか。三人の少女と一人の少年の物語が始まる。

プロローグ（前書き）

今回、子供の上条当麻となのは達のキャラクターをクロスオーバーさせて見たら、どのようになるのか興味を抱き、このような小説を書かせていただきました。

尚、この小説に出てくる上条はなのは達と同年ですので、原作の上条当麻とは少しばかり性格が異なるかもしれませんが、ご注意ください。

後、更新速度がゆっくりになるかも知れませんが、それでもよろしければお願いします。

プロローグ

少年はどこまでも『不幸』だった。

周囲の子供は彼の姿を見るなり石を投げ、周りの大人もその行為を止めようもしない。

疫病神と呼ばれ、蔑まれ続けた少年。

借金を抱えた男に追い回され包丁で刺されたこともあった。

マスコミに『化け物』扱いされ、カメラに写されたこともあった。

そして、少年は両親を事故で失った。

唯一の味方さえ失った少年は孤独だった。

そんなある日、彼は両親の知り合いと名乗る人物から海鳴市に行くように促される。

九歳の上条当麻は、海鳴市での新たな生活を始めるのだった。

第1話 担任は少女！？（前書き）

相変わらず色々残念ですが、頑張っていきたいと考えておりますので、よろしく願います。

第1話 担任は少女！？

電車に乗って海鳴市に向かう少年。

今まで住んでいた場所とは全く異なる海鳴市で新たな生活を始めることになる上条当麻。

しかし、少年には新生活に胸を躍らせたり、不安を抱いたりするといったことは一切無かった。

元々住んでいた場所では、陰湿ないじめを受け続けて、両親を事故で失い、少年は何かも失った。

海鳴市で新たな生活を送ろうが、自分が疫病神であることに違いは無い。

九歳の子供とは思えない考えを抱きながら、少年は電車の中で深い眠りについた。

同時刻、二人の少女は海鳴市に到着していた。

「ここが海鳴市…」

「ああ…」

「ここにジュエルシードがあるんだね…」

「フエイト…あまり無茶しちゃだめだよ…」

「大丈夫…」

海鳴市に着いた上条当麻。

話によると、海鳴市の駅に転校先の小学校の担任が来ている筈なの

だが、それらしき人物は見当たらなかった。

当麻「これからどうしようかな…」

担任の教師が来ていないのに、自分だけが無闇やたらと動くわけにはいかないと考えていた少年は呟く。

そんな少年に近づいてくる中学生くらいの少女が居た。

???「君…どうしたの？」

当麻「あなたは？」

真紀「私の名前は結標真紀よ」

当麻「上条当麻です」

真紀「何だが困っているみたいだったから…」

当麻「実は…」

事情を話した少年に少女は…

真紀「だったらお姉さんが一緒に探してあげるわ」

当麻「でも…迷惑を掛けますし…」

真紀「気にしない気にしない 単なるお節介だから」

半ば強引に協力を申し出る結標真紀に上条当麻は断りきれずに、申し出を受ける。

早速、担任の教師を探すために行動を開始する二人。

真紀「そう言えば、当麻君は何処の小学校に転校するのかしら？」

当麻「私立聖祥大附属小学校です」

真紀「私の母校じゃない!？」

当麻「そうですねですか？」

真紀「ええ。聞き忘れていたけど担任の先生の名前は？」

当麻「月詠子萌先生ですけど…」

真紀「子萌先生なの!?!? 確かに先生には見えないわよね…」

当麻「???」

真紀が言っていることが理解できずに、首を傾げる少年。

真紀「ちょっと待ってね」

携帯電話を取り出し、誰かに連絡する。

真紀「子萌先生に連絡したから、ちょっとそこの喫茶店で待ってましょ?」

当麻「はい」

『喫茶店』

真紀に促されるままに、喫茶店に入る当麻。

真紀「何か食べたいものあるかしら？」

当麻「いえ…」

真紀「子供が遠慮なんてしないの すいませ〜ん。お子様ランチー
つとイチゴパフェーっお願いしま〜す！」

少年の言葉を見殺して、メニューを頼む真紀。

メニューを待つ二人の下に、一人の少女が向かってくる。

???「うゝ。警察の人に勘違いされちゃいましたよ…」

真紀「ようやく来たのね子萌。まあ…警察が勘違いするのもおかし
くないけどね…」クス

子萌「酷いですよ〜結標ちゃん〜」

当麻「子萌？」

その名前に少年は聞き覚えがあった。担任の名前が確か月詠子萌だ
った。しかし、目の前の少女はどうみても大人に見えない。

子萌「貴方が上条当麻ちゃんですか？」

当麻「は…はい…」

子萌「月詠子萌です。先程は遅れてしまって申し訳ありませんでし

た」

そう言つて頭を下げる子萌。

しかし、少年は子萌の謝罪など全く頭に入つておらず…

当麻「先…生…？」

目の前の少女が自分の担任であることが信じられなかった。

真紀「まあ普通はそんな反応するわよね」

子萌「こらゝ！私はれっきとした大人なのですよゝ！」

頬を膨らませて怒る子萌の姿だが、全く迫力が無く、寧ろ愛くるしい印象を与える程である。

呆然としている少年だったが、子萌の一言で正気に戻る。

子萌「ともかく…ようこそ！海鳴へ！」

子萌に歓迎されて、どう反応すればよいのか分からずおろおろする少年。

そんな二人の様子を見ながら、微笑む真紀。

子萌が二人の下に現われてから、少しの時間が経ち、三人の前に料理が運ばれる。

お子様ランチを食べる少年とイチゴパフェを食べる少女。
食事が終了した三人は喫茶店を出る。

真紀「さて…私はそろそろ用事があるから此処でお別れだね」

子萌「結標ちゃん。ありがとうございました」

上条「ありがとう…ございました…」

真紀「そんじゃあまたね」

ヒラヒラと手を振りながら二人の前から立ち去る少女。

子萌「それでは行きましょうか？」

当麻「はい」

二人は私立聖祥大附属小学校に向かう。
時刻は昼前だった。

『私立聖祥大附属小学校』

お昼休みになり、高町なのはとアリサ・バニングス、月森すずかの
三人は今日転校してくる予定の転校生について話していた。

なのは「子萌先生が迎えに行ってたけど大丈夫かな…？」

アリサ「まあ子萌はあの見た目だから…」

すずか「トラブルに巻き込まれていないといいんだけど…」

三人は、子萌の見た目が原因で起きる問題を何度も目撃していたの
だ。

車を運転すれば未成年が運転していると誤解され、お酒やタバコを
買うときも警察に突き出されそうになった事もあるのだ。

転校生を迎えに行ったからといって、何事も無く帰ってくる可能性

は非常に低いのだ。

すずか「転校生って男子なのかな？それとも女子かな？」

アリサ「後少しで分かるんじゃない？」

なのは「友達になれるかな？」

すずか「きつとなれるよ」

アリサ「嫌な奴じゃないといいな…」

昼休憩が終了して、教室に戻ってくる子萌。

子萌「はいはい。皆さん静かにして下さいね」

子萌の言葉に反応して、席に戻る生徒達。

子萌「それでは転校生を紹介したいと思います！」

子萌の言葉にざわめく教室。

子萌「どうぞ」

彼女の言葉と同時に、教室に入ってくるツンツン頭の少年。

子萌「自己紹介をお願いします」

当麻「上条当麻です。よろしくお願いします」

なのは「（あれ？あの子？）」

なのは当麻の目に見覚えがあった。

アリサ「何か普通だね…」ボソッ

すずか「ア、アリサ…」

当麻「(何だかこのクラス…女子の方が多い…?)」

少年はそんなことを考えながらも、淡々と自己紹介を済ませていった。

第1話 担任は少女！？（後書き）

淡希「シヨタはどこ！？」

主「この時点でアンタはまだ子供だろ！？」

淡希「シヨタのためなら時間を越えるくらい余裕よ！！」

当麻「この人は？」

淡希「シヨタゲットオオオ！！」 シュン

当麻「え？」 シュン

主「…次回もよろしく…」

第2話 初めてのフラグ建築

『私立聖祥大附属小学校』

子萌「上条ちゃんの席は、高町ちゃんの隣ですよ」

子萌の言葉を聞いた少年だったが、肝心の高町という子が分からない。

そのことを知ったアリサは…

アリサ「此处だよ」

なのはの隣の席を指差す。

少年は少女が指差した席まで移動して、お礼を言った。

当麻「あ、ありがとう」

アリサ「どういたしまして」

少年はアリサにお礼を言った後に、席に着いた。

子萌「上条ちゃんへの質問はHRが終わってからにして下さいね」

子萌の忠告を生徒達は素直に聞いて、HRを済ませていく。

そして、HRが終わってクラスメートによる上条当麻への質問攻めが行われた。

「何処から来たの？」

「趣味は？」

「何処に住んでるの？」

クラスメートの質問攻めにおろおろする当麻。

アリサ「そんな一斉に質問しても答えられるわけ無いでしょ！」

当麻「君は？」

アリサ「アリサ・バニングスよ」

アリサの隣に居た二人の少女も自己紹介を行った。

すずか「月森すずかです」

なのは「高町なのはだよ」

三人の少女が続いてクラスメートも自己紹介を始める。

浜面「俺の名前は浜面仕上だ。よろしくな」

ボサボサ頭の少年が自己紹介を行う。

数少ない男子のクラスメートが増えたことで喜んでいるのだろう。

アリサ「早速だけど、色々質問してもいいかしら？」

当麻「うん」

アリサの質問に答える当麻。

クラスメートもそれで満足したのか、それぞれ席に戻る。

なのはは無意識に当麻を見つめていた。

少年の目に見覚えがあるのだが、それが何かは分からない。

アリサ「なのは？どうしたの？」

なのは「ううん。何でもないよ」

授業が終了して、今日から暮らすことになるマンションに向かう上条当麻。

自宅に向かつて居た少年は、クラスメートの月森すずかに会おう。今にも泣き出しそうな表情をしている少女を、お人好しの少年が放っておける筈もなく…

当麻「どうしたの？」

すずか「上条君？」

すずかに事情を話すように求める少年。

他人から拒絶され続けた少年が自ら起こした行動。

少女が『不幸』に巻き込まれているのならば、自分がその『不幸』を背負えばいい。

そう考えた故の行動だった。

すずか「実は…」

自宅で飼っている猫が居なくなってしまったと話す月森すずか。

現在、家の人間に猫の搜索を手伝ってもらっているのだが未だに見つけられないということ。

少女からその話を聞いた少年の答えは決まっていた。

当麻「僕も手伝つよ」

すずか「え…でも…」

当麻「気にしないで」

猫の搜索を手伝うことを申し出る上条当麻。
あまり、他人に迷惑を掛けることが出来ないと考えていた少女だったが、少年の申し出を素直に受けることにした。

当麻「じゃあ僕はあっちを見てくるよ」

少女と別れ、猫を見つける為に動く少年。
猫を探し始めてから、数十分が過ぎる。

当麻「どこにいるんだろう…?」

周囲を見ながら歩く少年。
そこで彼は、道路にいる猫を見つける。
少女が猫の特徴に一致している事から、その猫が少女の飼い猫であることを推測する。

しかし、飼い猫にトラックが迫りつつあることを察知した少年は道路に飛び出す。

当麻「危ない!!」

しかし、少年が道路に飛び出したところで、状況が好転するわけではない。

少年は、猫だけは守ろうと強く抱きしめる。

トラックが少年を激突すると思われたが…

『Protection』

無機質な声が響き渡る。

少年に激突するはずのトラックは、何かに阻まれてその動きを止められていた。

何が起きたのか全く理解できない上条当麻は、自分の近くに金髪の少女を見かけた。

その少女はその場から、上条の姿を確認するとその場から立ち去って行った。

少年は少女にお礼を述べようとしたが、少女は既にその場におらず、一旦すずかに猫を見つけたという報告をするために、その場所を離れた。

猫を連れて少女に再び会った少年。

少女は目にうつすらと涙を浮かべながら、猫を抱きしめていた。

すずか「上条君…ありがとう…」

生まれて初めて他人から感謝の言葉を述べられて、動揺する上条。これが、少年が生まれて初めて他人にフラグを立てた決定的瞬間であることは誰も知る由がない。

感謝の言葉を述べる月森すずかと別れて、少年は気を取り直してマンションに向かう。

唯一の気掛かりと言えば、金髪の少女にお礼の言葉を述べられなかったことだが、今度会った際にお礼を言おうと決意する少年。

『マンション』

マンションに向けて歩き始めて数十分後、少年はマンションに到着

する。

海鳴市が一望できる様な大きさのマンションに、少年は溜息をつく。貧乏というわけではないが、いかにもな高級マンションに驚きを隠せない少年。

こんな所で、一人暮らしを始めるのだから、少々の不安を覚える。荷物は事前に、自室に運ばれているらしく少年は自身の部屋に向かう。

そこで、扉の前に着いた少年だったが、その隣の部屋の扉の前に一人の少女がいることに気付く。

その少女こそ、少年がお礼を延べようと思っていた人物だった。

???「あつ…」

当麻「君は…」

思い掛けない出会いに動きが止まる二人だったが、もう一人の少女がその場に乱入する。

???「どうしたんだいフェイト？誰だいアンタ？」

当麻「こ…こんにちは」

もう一人の少女に話しかけられて、挨拶をする上条。

フェイトと呼ばれた少女は、もう一人の少女に話しかける。

???「ふん。なるほどね」

フェイトの話を聞いて納得する少女。

少年は少女達が話している内容よりも、少女に犬耳がついていることに疑問を抱いていた。

フェイト「どうして君が此处に居るの？」

当麻「今日からこの部屋で暮らすことになったんだけど…」

「え？」

少年の言葉が予想外だったのか、動きの止まる二人。
少年に聞こえないような声量で、話した二人はそれぞれ自己紹介を行った。

フェイト「そうだったの…私はフェイト・テストロッサ」

アルフ「アルフだよ。よろしくな」

当麻「上条当麻です」

二人が自己紹介して、少年も自己紹介する。

当麻「あの時は助けてもらってありがとう」

フェイト「え…いいよ。気にしないで」

どうやら少女もお礼を言われることに慣れていないのか、少しばかり動揺していた。

当麻「あの…お礼がしたいんだけど…」

フェイト「お礼なんて…」

当麻「じゃあせめてこれだけでも…」

そう言つて少年は鞆からお菓子を取り出す。
海鳴市に着いた時に、購入したものだ。
少年はそれをフェイトとアルフに渡す。

フェイト「あ…ありがとうございます…」

アルフ「あたしも貰つていいのかい？」

当麻「はい」

照れているフェイトと喜んでいるアルフ。

そんな二人の姿を見て、少年は心が温かくなった。

海鳴市でも、元居た場所と同じように他人から傷付けられる事を覚悟していたが、海鳴市に来てまだ、一日も経っていないが、皆が非常に優しいということはよく分かった。

海鳴市は少年にとってあまりにも眩しく、そして心地良かった。

フェイト「海鳴市には初めて来たの？」

当麻「うん」

アルフ「親御さんはどうしたんだい？」

アルフの疑問は最もだった。

右も左も分らない状態で、少年を一人で今日から住む場所に向かわせるなど、普通の親ならそんなことをさせる筈はない。

アルフの疑問を聞いた上条当麻の表情は少しばかり暗くなった。

当麻「お父さんとお母さんは居ないんだ…」

アルフ「それはどういう…」

当麻「ちょっと前に事故でね…」

フェイト&アルフ「!?!」

予想外の言葉に、フェイトとアルフは驚愕する。

フェイト「ごめんね…」

アルフ「悪かったね…」

当麻「ううん…」

空気が重くなり全員が黙る。

そんな沈黙を破ったのは、アルフだった。

アルフ「ま、まあとにかくこれからはお隣さんってことでよろしく
!!!」

アルフが無理やり明るく振舞い、フェイトと当麻の二人も明るく振舞う。

二人と別れて、自室に入った少年は鞆から写真を取り出す。
そこに写っていたのは、笑顔の両親と上条当麻だった。

フェイトとアルフの二人も自室に戻っていた。

アルフ「親がいない…か…」

フェイト「…」

アルフ「どんな気持ちなんだろうね…」

彼女達も、少年と同じく海鳴市に初めて訪れたのだが、少年とは異なり明確な目的がある。

本来なら少年の事など、気にしている余裕は無い。

しかし、少年が見せた寂しそうな顔が彼女達の脳裏に焼きつく。

それぞれの思いを胸に抱き、少年達は明日を迎える。

第2話 初めてのフラゲ建築（後書き）

御坂「あいつが子供になっ たっ て!？」

主「そうだけど？」

御坂「あいつはどこなの!？」
「ビリビリ

主「ちょ…放電してるよ!？」

御坂「とつとと教えなさい!？」

主「結標さんが連れ去りました…」

御坂「何ですってええ!?!」
「ドオン

主「ぎゃあああ!?!」

第3話 暖かな食卓

翌日の放課後、月森すずかはアリサ・バニングスと高町なのはに昨日の出来事を話した。

少年の事を語るときの少女の頬が少しばかり赤かったことには、二人とも気付かなかった。

アリサ「意外と親切なのね」

すずか「うん」

なのは「そんなことがあったんだ」

アリサ「暗そうな雰囲気だったから薄情だと思ったけど、そうじゃなかったのね」

なのは「ア…アリサちゃん…」

少女達が上条当麻について話している頃、上条当麻は浜面仕上に小学校の屋上に呼び出されていた。

少年は暴力を奮われるのかと考えていたが、海鳴市に来る前の彼にとっては日常茶飯事だったので、特に気にするほどのことでもなかった。

屋上に到着した彼を待っていたのは、浜面仕上ただ一人だった。

仕上「来たか」

当麻「何の用？」

仕上「まあちよつとこつちに来いよ」

少年の言葉に従う当麻。

浜面に呼ばれた位置まで移動した彼が見たものは、海鳴が一望できるとても綺麗な景色だった。

当麻「これって…」

仕上「綺麗だろ？俺の秘密のスポットなんだよ」

当麻「どうして教えてくれたの？」

仕上「何かお前、元気が無いみたいだからさ。まあ、疲れたときはこの景色でも見て元気だせって」

当麻「あ…ありがとう浜面君…」

仕上「浜面でいって、俺も上条って呼ぶからさ」

当麻「う…うん」

転校してきたばかりの人間にお気に入り場所を教えるなど、浜面仕上もとても親切であると実感する上条当麻。

しばらくの間、少年達は屋上から海鳴の景色を眺めていた。

浜面と別れた少年は、晩御飯の材料を買う為に最寄のスーパーに寄った。

そこで、彼は先日お世話になった結標真紀に出会う。

真紀「あら、上条君じゃない」

当麻「昨日はありがとうございました」

真紀「どういたしまして」

どうやら彼女も買い物中だったらしく、買い物袋を持っていた。

彼女と一通り世間話をした後、少年は少女と別れた。

晩御飯の材料を買った少年は、マンションに向けて移動し始めた。

少年が自宅に向かっている頃、高町なのはは自宅にて上条当麻のことを両親に話していた。

なのは「…だっただよ」

桃子「随分親切な子ね」

土地勘の働かない場所で、猫を探すのは下手をすれば迷子になる危険性を含む。

少年が何も考えなかった可能性もあるのだが…

士郎「そうだ。なのは、今度彼を家に招待すればいいんじゃないか？」

なのは「え？」

士郎「始めて海鳴市に来るのなら、不安もあるだろうし、それにその子に会ってみたいからな」

桃子「彼の歓迎会をすればいいんじゃないかしら？」

なのは「でも、まだ知り合ったばかりだし…そこまで親しいってわけじゃないし…」

いくら高町家の人間がとても親切だと言っても、知り合ったばかりの人間の家にお邪魔することなど、少年が反対する可能性が高い。そんな少女の様子を見ていた士郎は…

士郎「それならクラスの歓迎会ということにすればいい。それなら、彼も参加しやすいだろうからね」

なのは「そうだね。じゃあ明日聞いてみる」

なのはが両親と話している頃、少年はマンションに到着していた。帰宅した少年は早速、晩御飯を作り始めた。料理を作っていた少年だったが、突如玄関の方向から音が聞こえた。

ぐっ！！

不審に思った少年が、玄関に向かい扉を開ける。

アルフ「う…腹減った…」

当麻「だ…大丈夫…？」

玄関を開けた少年が見たのは、涎を垂らしたアルフだった。アルフの態度から、お腹が減っていると判断した少年は…

当麻「もし良かったら、ご飯食べる？」

アルフ「え…いいのかい…？」

当麻「まだ作ってる途中だけど…」

アルフ「ありがとう!!」

目を輝かせてお礼を述べるアルフに若干顔が引き攣る当麻。
部屋にアルフを案内した当麻は、料理を再開する。

ちなみに、夕食のメニューは若鶏のから揚げ、味噌汁の二品だった。
両親が亡くなってから、一人で暮らしていた少年にとって料理は密かな趣味となっていた。

料理の匂いを嗅いだアルフのお腹の音は益々激しさを増していた。
そんなアルフの様子を見た当麻は、ある疑問がわいた。

当麻「いつもご飯はどうしてるの?」

アルフ「インスタントだけど?」

当麻「ご飯は作らないの?」

アルフ「あたしもフェイトも作れなくてね」

当麻「それって...『ピンポン』...ん?」

インターホンが鳴って当麻は玄関に向かう。

玄関に居たのは、フェイト・テストロッサだった。

フェイト「あ...あの...アルフが来てないかな?」

当麻「来てるけど...」

アルフ「フェイト...おかえり」

フェイトの言葉に手をヒラヒラ振りながら、

まるで、自分の部屋の様に振舞うアルフに溜息をつくフェイトと苦笑いをする当麻。

フェイト「何やってるの…?」

アルフ「当麻がご飯を作ってくれるって」

フェイト「え?」

当麻「君も食べる?」

フェイト「でも…迷惑じゃ『ぐ』…あ／／／」

当麻「ちょっと待っててね」

フェイト「…」コク

少年の言葉に若干赤くなりながら、無言で頷く少女。

アルフはそんなフェイトの様子を見ながら、笑っていた。

ようやく、料理が完成して料理をテーブルの上に並べる当麻。

フェイトとアルフも待っているだけではなく、皿を並べるのを手伝ったりした。

当麻「いただきます」

アルフ「いただきます」

フェイト「い…いただきます」

料理を食べ始める三人。

普段から、インスタント食品ばかり食べていた二人にとって、少年の料理はとても美味しかったらしく…

アルフ「美味い…美味いよ…!!」

フェイト「美味しい…」

凄まじい速度で箸を進める二人の様子を見ていた少年は、内心とても喜んでいた。

自分の料理を誰かに食べてもらう経験なんて、今までの人生で一度も無かったが、初めて他人に振舞った料理を絶賛されたのは、非常に嬉しかった。

その上、誰かと一緒に食事自体が久々で、食事もいつもより美味しく感じていた。

この瞬間、上条当麻は確かに『幸せ』だったのだ。

アルフ「ご馳走様!! あゝ美味かった」

フェイト「ご馳走様。本当に美味しかった」

当麻「ご馳走様」

夕食を食べ終わった二人に、少年は一つの提案を行う。

当麻「あのさ…これからも二人の料理を作ってもいいかな？」

フェイト「でも流石に何度もご馳走になるのは…」

当麻「駄目かな？」

アルフ「ここはトウマのお世話になるうよフェイト」

フェイト「で…でも…」

当麻「僕が作りたいだけだから、フェイトは気にする必要なんてないよ」

フェイト「当麻…本当にいいの？」

当麻「うん」

アルフ「よっしゃ！これから毎日、美味しいご飯が食べられる！」

フェイト「あ…アルフ…」

当麻「あはは…」

第4話 孤独な少年と少女（前書き）

五和「上条さんが子供になったですって!!?」

神崎「上条当麻が子供に!?!」

御坂妹「あの人が…フフ…」

姫神「今の内に手懐けておけば…」

インデックス「ごはんはどうするの!?!」

レッサー「子供の内から調教しておけば、イギリスの引き込むことも容易かもしれません!?!」

主「上条当麻を巡る女性達の戦いが始まる。しかし、彼女達は知らない。彼女達自身が絶大な実力を持っているなど…」

上条「何ナレーションしてんだよ…」

主「ふざけすぎた…今回もよろしく願いします」

第4話 孤独な少年と少女

『マンション』

少年がフェイトとアルフの料理を担当することに決まってから一夜明けた。

早速、朝ごはんを作り始める上条当麻。

ピンポン！！

当麻「はい」

少年が玄関に向かい、扉を開けるとそこにはフェイトとアルフが居た。

アルフ「おはよう」

フェイト「おはよう」

当麻「おはよう」

二人をリビングに案内して、再び料理を作り始める少年。

そんな少年の様子を見ていたフェイトは、何か手伝えることはないかと尋ねたが、特に手伝ってもらうこともないので、少女の申し入を断った。

それから、少し時間が経って料理が完成した。

アルフ「いったただきま〜す！！」

フェイト「いただきます」

当麻「いただきます」

朝食を食べ始める三人だったが、当麻がアルフにある質問をした。

当麻「ずっと気になってたけど、その耳は付けてるの？」

フェイト「そ…そうだよ…ねえアルフ…」

アルフ「いやこれは…」

フェイトの言葉を否定しようとするアルフだったが、フェイトの態度を汲み取ったのか少女に合わせた。

アルフ「そ…そうなんだよ！！中々似合うだろ！？」

当麻「う…うん…」

そんな二人の態度を見た少年は、未だに疑問を抱いたままだったが、とりあえずこの問題に対しては保留にしておくことにした。

当麻「ところで二人とも、学校はどこに言ってるの？」

フェイト&アルフ「それは…」

少年に自分達の事情を話すわけにはいけないと考えている二人は、その疑問に正直に答えるわけにはいかなかった。

フェイト「色々事情があつて…今は学校に行つてないんだ…」

アルフ「同じく…」

当麻「そうだったんだ…何だかごめんね…」

フェイト「気にする必要なんてないよ!」

アルフ「そ…そうだよ!」

慌てて取り繕う二人の様子を見て、少年は少し笑い…

当麻「それなら弁当を作ったほうが良さそうだね」

フェイト「流石にそこまでしてもらうわけには…」

当麻「前にも言ったけど、僕が勝手にやってることだから気にしないで」

当麻の態度を見たフェイトは、少年はこちらが断つても譲らないだろうと判断して、少年の申し出を受けることにした。

早速、二人分の弁当を作り始める少年。

そんな少年の後ろ姿を眺めていた二人は…

フェイト「どうしてここまでしてくれるんだろう…?」

アルフ「きつとトウマもフェイトと同じように優しいんだよ」

それから少年が弁当を作り終えて二人に渡して、少年も学校に向かった。

『私立聖祥大附属小学校』

昼休憩になり、給食を食べていた少年の下に高町なのはがやって来た。

当麻「高町さん？どうしたの？」

なのは「上条君。ちょっといいかな？」

彼女の隣にはアリサとすずかも居た。

当麻「う…うん」

なのは「あのね…」

少女はクラスで少年の歓迎会をしたいということを少年に伝える。

当麻「でも…皆に迷惑かけるし…」

なのは「そんなことないよ」

アリサ「そうよ」

すずか「駄目かな？」

当麻「ぼ…僕でよかったら…」

アリサ「よし！これで決まりね！」

少年の了承を経て歓迎会を行うことが決定する。

『公園』

上条当麻が昼休憩を迎えている頃、フェイトとアルフの二人は海鳴市の公園で弁当を食べていた。

アルフ「見つからないね。ジュエルシード」モグモグ

フェイト「うん…」モグモグ

アルフ「確かにこの世界で間違いないはずんだけど…」

フェイト「こればかりは地道に探すしかないよ」

アルフ「それもそっかぁ」

フェイト「（もし、この世界に無かったら、当麻とお別れすることになる…）」

二人の少女がこの世界で出会った一人の少年。

たった二日程度しか経っていないが、彼女達は少年ととても仲良くなっていた。

自分で料理が作れない彼女達にとって、少年が作る料理は新鮮だったし、一緒に食事をしている間は、確かに楽しいと感じていた。

海鳴市にずっと留まる訳にはいかない少女達にとって、少年という時間は大切にされたのだ。

『図書館』

小学校の授業が終了して、少年は真っ先にマンションに帰ろうとは

せず、図書館に向かった。

海鳴市に来る以前も、図書館にいたことが多かった少年。

他人から傷つけられるばかりの少年にとって、図書館は唯一静かに過ごせる場所だったのだ。

海鳴市の図書館に入って、何か適当な本はないかと探していた当麻だったが、そこで彼は一人の少女を見かける。

???「やっぱり取れんな〜どうしよう…」

何やら車椅子の少女が本を取ろうとしているのだが、少女が取ろうとしている本の位置が、高いところにあり、彼女は困り果てているようだった。

そんな少女の下に、少年は近寄ると…

当麻「あの…手伝おうか？」

???「え？」

突然の申し出に動揺する少女だったが、少し時間を置いた後…

???「頼んでもええの？」

当麻「うん」

???「あの本なんやけど…」

当麻「分かった」

少女が指差した場所にある本は、少年の背が届かない場所にあったらしく、少年は脚立を使用して本を取ったのだが…

ガシャーン！！

脚立から盛大に落ちた少年は、勢い良く地面に激突する。

「???」だ、大丈夫か!？」

当麻「いたた…大丈夫だよ…慣れてるから…」

幼い頃から生傷の絶えなかった少年にとって、この程度のことは大して気にするほどのことでもなかった。

「???」慣れてるって…」

当麻「それより…はい…」

そう言って少年は少女に本を渡す。

「???」おおきに」

当麻「どういたしまして」

「???」初めて見る顔やけど、図書館に来るのは初めてなん?」

当麻「少し前にこの町に引っ越してきたんだ」

「???」そうだったんか。そういやまだ自己紹介しとらんかったね。
八神はやてや」

当麻「上条当麻だよ。八神さんは良く図書館にいるの?」

はやて「せやな。基本的に四六時中に図書館におるで」

当麻「学校はどうしたの？」

はやて「事情があつて行けないんや…」

当麻「ごめんね…」

はやて「ええて。上条君が気にすることやあらへん」

沈む少年を元氣付ける少女。

はやて「そう言えば、上条君は始めてこの図書館に来たって言つたけど、案内してあげようか？」

当麻「いいの？」

はやて「困ったときはお互い様や」

当麻「ありがとう」

少女に図書館を案内してもらう少年。

二人は話しながら、ある共通点があることが発覚する。

上条当麻と八神はやては事故で両親を亡くしており、ずっと一人暮らしだったということ。

同じような境遇の人間に出会つていなかった二人は、非常に驚いていたが、再び話し始めていた。

はやて「上条君の趣味は料理なんやな」

当麻「八神さんも料理が趣味なんだね」

はやて「今度、家の料理を食べてみるか？」

当麻「こっちも何か作ってこようか？」

はやて「せやね」

当麻「そろそろ帰らなきゃ…」

はやて「そっか…」

当麻「じゃあ八神さん。また明日」

はやて「…上条君。また明日な」ニコ

上条当麻は八神はやてと分かれて帰路に着く。
その頃、海鳴市に一人に男が訪れていた。

「???」ここが海鳴か…この霊装の威力を試すのに最適な場所だな
…」

男は引き裂いた様な笑みを浮かべて歩を進めていた。
平和な町に迫り来る危機に気付く者は誰もいない。

第5話 謎の『右手』

数日後、上条当麻は浜面仕上とアリサ・バニングス、月森すずかと高町なのはの五人で昼休憩を過ごしていた。

最初は、緊張していた少年も浜面やなのは達の協力もあり、徐々にクラスに打ち解けてきた。

仕上「学園都市に行ってみて〜な〜」

アリサ「どうしたのよ浜面？」

仕上「だって科学技術が物凄く発達してんだぜ？何か夢があるじゃん」

なのは「そういうもののなの？」

当麻「分からないけど…」

すずか「子萌先生も学園都市から来ているのよね？」

なのは「うん」

当麻「どうして子萌先生は海鳴に来たんだろう？」

仕上「それは本人に聞いてみねーと分かんねーだろ」

アリサ「でも浜面。学園都市って旅行で行ける様な場所じゃないの

よ？」

仕上「マジで？」

すずか「年に一度、大覇星祭っていう行事で外部の人に一般開放されるらしいけど…」

なのは「基本的に、学園都市に学生として入学したら、学園都市の外に行くだけでも大変な手続きが必要になるんだって」

仕上「うへえ…あんまいもんじゃねえな…」

当麻「浜面は学園都市に行きたかったの？」

仕上「だってロボットがいるんだぜ！？男のロマンだろ！？」

なのは「そうなの？」

当麻「僕にはよく分かんないけど…」

仕上「分かってねえな上条。それに超能力なんて物もあるんだぜ？」

なのは「脳を開発して超常現象を引き起こす力だっけ？」

すずか「でも、脳を開発するなんてちょっと怖い」

アリサ「大体、超能力なんて何に使うのよ？」

仕上「う…それは…」

アリサ「全く…浜面は浜面なんだから」

他愛ない話をする少年少女達。

そこで、浜面が何かを思い出したように語る。

仕上「そういや、ここ最近海鳴で何か事件が起きてるらしいけど、あれは化け物の仕業っていう噂があるらしいぜ」

当麻「化け物の仕業？」

なのは「そんなのがいるの？」

アリサ「いるわけないでしょ…」

すずか「ア…アリサ…」

仕上「何でも石の巨人みたいなのが、暴れまわってるらしいんだ」

アリサ「石の巨人ねえ…」

当麻「どれぐらい大きいの？」

仕上「そこまでは分からないけど、多分巨人っていうくらいだから、相当でかいんだろうぜ」

雑談している少年少女達だったが、そこで思わぬ横槍が入る。

子萌「みなさん。今日の授業はこれで終わりになりました」

予想だにしなかった月詠子萌の言葉に動揺する一同だったが、

仕上「せんせゝそれって、海鳴の事件が原因ですか？」

子萌「秘密です。皆さんは寄り道せずに帰ってくださいね」

そう言つて教室から出て行く子萌。

その後ろ姿を見ていた少年少女達は…

「「「「怪しい…」」」」

全員、子萌の態度を不審に感じていた。

しかし、子萌の言葉を素直に聞いていた一同はそれぞれ帰宅することに決めた。

上条当麻が小学校から出た頃、フェイト・テストロッサとアルフは海鳴市のスーパーを訪れていた。

何故彼女達がスーパーに来ているのかというと、フェイトが上条に料理を作らせつつ放しでは忍びないので、買い物だけでも任せて欲しいと言ったからである。

フェイト「えっと…この商品は…」

アルフ「フェイトゝこれ買ってもいい？」

フェイト「いいよ。それで…これは…何処にあるの？」

順調に買い物を済ませていくフェイトだったが、少年に頼まれた商品が見つけれなかった。

途方に暮れている少女達に近づく一人の女子中学生が居た。

真紀「どうしたの？」

フェイト「あ…えっと…商品を探しているんですけど…見当たらないくて…」

真紀「もし良かったら手伝いましょうか？」

アルフ「いいのかい？」

真紀「困ったときはお互い様だからね」

フェイト「あ…ありがとうございます」

真紀「それじゃちゃっちゃと見つけちゃいましょうか」

結標真紀に協力してもらい、再び商品を探し始めるフェイトとアルフ。

探していた商品が見つかり安堵する二人。

アルフ「ありがとね」

フェイト「ありがとうございます」

真紀「どういたしまして。それじゃ〜ね〜」

手をヒラヒラ振りながら二人の前から去っていく少女。

フェイト「親切な人だったねアルフ」

アルフ「そうだね」

買い物を終えた少女達は、マンションに向けて移動を開始した。
その頃、上条ははやてに出会っていた。

どうやら彼女は今日も図書館に出かけていたのだが、図書館がいつもより早く閉じてしまい、困っているところだったらしい。

はやて「それにしても、物騒な世の中やな」

当麻「そうだね。早く事件が解決するといいんだけど…」

はやて「せやな…って何やあの人…けつたいな格好しおってからに…」

当麻「ちょ…八神さん…失礼だよ…」

二人は一人の男を見かける。

その男は黒い服装をしているのだが、明らかに過剰にアクセサリーの様な物を身に纏っていた。

海鳴では決して見る事の無い姿の人間に、若干警戒心を抱きながら男の前を通り過ぎようとする二人だったが…

???「この力…素晴らしい…」

男はそう呟くと、懷からチョークの様な物を取り出して、地面に何かを描き始めた。

ズゴォ！！

瞬間、地面が隆起して巨大な石の巨人が二人の前に現われた。

ゴーレム「グオオオオオオ!!」

当麻「な…あれって…」

はやて「な…なんなん…あれ…」

浜面仕上から聞いた単なる噂だった筈の存在が、上条当麻と八神はやての前に居た。

???「殺せ」

男の言葉を聞いた瞬間、少年は少女の車椅子の取っ手を掴みその場から全力で逃げ出していた。

未だに目の前の現実を受け入れる事が出来ない二人だったが、あのゴーレムが危険ということは本気で理解したのだろう。

必死で怪物から逃げる二人だったが、焦りながらも会話を交わす。

はやて「上条君!なんなんあれ!？」

当麻「分かんないけど、とにかく逃げなきゃ!!」

全力で逃げる二人を追いかけけるゴーレムだったが、二人が子供ということもあり、姿を見失ってしまう。

???「ちっ…」

男は二人を逃がしてしまったことに苛立つが、例え警察を呼んだところで何かが出来るわけでもない。
ゴーレムを撒いた二人は…

当麻「何とか逃げ切れたのかな…？」

はやて「上条君…私…怖い…」

無理もないだろう。

ゲームやアニメの様な非現実な出来事が目の前で起きたのだから…

当麻「一旦僕の家になんかしよう！」

はやて「え？」

少年は少女をマンションに連れて行くことを決意する。

動揺するはやてだったが、少年もそこまで気が回っておらず、少女の言葉を無視してマンションに辿り着く。
そこで彼はフェイトとアルフに遭遇する。

フェイト「当麻？どうしたの？」

冷や汗の出ている少年を不審に思ったフェイトは当麻に問いかける。

アルフ「そっちの子は？」

当麻「悪いけどこの子をお願い！！」

アルフの質問を無視して、少年は再びゴーレムの所に向かおうとする。

はやて「駄目や上条君！！危険すぎる！！！」

当麻「大丈夫だよ」

一言呟き、少年は先程ゴーレムと遭遇した場所まで走って行った。

はやて「上条君…どうして…」

フェイト「一体何があったの？」

二人に何があったのか尋ねるフェイト。

はやては先程の出来事をフェイトに語る。

少女の言葉を聞き終えたフェイトは…

フェイト「アルフ！！この子をお願い！！」

アルフ「分かった！！」

はやて「危険や！！」

フェイト「大丈夫…当麻は任せて！！」

フェイトも上条が向かって行った方向へ駆け出す。

はやてはそんな少女を呆然と眺めていることしか出来なかった。

先程、ゴーレムと遭遇した場所まで戻ってきた少年。

辺りを見回す少年だったが、謎の男もゴーレムも見当たらない。

何処か別の場所に行ったのかと考える少年だったが…

きやああああ！！

悲鳴が聞こえて、その場所に向かって全力で駆け出す。

少年が悲鳴がした場所に辿り着くと、黒髪のショートの少女がゴーレムに襲われていた。

すかさず少年は少女とゴーレムの間に割り込む。

当麻「大丈夫？」

???「う…うん…」

当麻「良かった…君は早く逃げるんだ！」

???「で…でも…」

当麻「僕なら大丈夫…だから早く！」

少年の言葉を聞いた少女は、無言で頷きその場から逃げ切る。

少年は男とゴーレムを睨みつける。

男は少年の姿を見て鼻で笑い、ゴーレムに少年を殺すように命令する。

その拳は、人間の原型を留めることが不可能と言ってもおかしくないほどの威力を持っている。

少年は、目の前の存在が恐ろしくて震えが止まらない。

今すぐにでも逃げ出したい衝動に駆られる。

しかし、少年は逃げない。

今、ここで自分が逃げたら目の前の化け物は他の人間を襲うことを知っているから。

ゴーレムの拳が少年に迫る。

少年は両手を交差していた。

フェイト・テストアロツサは上条当麻を追っていたが、途中で見失ってしまう。

遅くなればなるほど、少年は危険に晒される可能性が高いと知っている少女は焦っていたが、突如そこまで遠くない場所から少女の悲

鳴が聞こえる。

少女は悲鳴が聞こえた方向に走り、その現場に辿り着くが、少年が今まさにゴーレムの一撃を受けようとしているところだった。少年を追っている為に「してない少女だったが、今から」「したところで少年を助けられるわけではない。

フエイト「当麻ああー!!」

少女の叫びも虚しく、ゴーレムの拳は上条当麻に直撃した。しかし、少年が死んでしまうという少女の幻想は殺された。

バキン!!

ゴーレムの拳が、上条当麻の『右手』に触れた瞬間、世界が割れる様な音が周囲に響き渡った。

ゴーレムの動きが停止することに驚愕する男とフエイトと当麻だったが、更に驚くべき出来事が発生した。

ボゴオオ!!

突如、少年に触れたゴーレムの身体が崩れ始めたのだ。

???「なっ…!?!」

フエイト「何が…!?!」

当麻「え…?」

あまりにも異常な事態に思考が停止する三人だったが、ゴーレムの身体が再び信じられない速度で再生する。

ゴーレムの胸元には小さな宝石の様な物が光を放っていた。
フェイト・テストロッサはその宝石に見覚えがあった。

フェイト「あれって…ジュエルシード!？」

???「くくく…とんだイレギュラーがあつたが、俺にがあの宝石がある」

男は実力のある「」ではなかったが、ジュエルシードを使用することにより、あれほどのゴーレムを作り出せる程の力を得たのだ。男は引き裂いた様な笑みを浮かべて、ゴーレムに再び少年を攻撃するように命令した。

しかし、この場にいるイレギュラーは上条当麻だけではなかった。

フェイト「バルディッシュ!！」

『Photon Lancer』

突如、金色の魔力弾がゴーレムに直撃する。

何が起きているのか理解できていなかった男と少年は、攻撃が放たれた場所を見る。

そこには、フェイト・テストロッサが居た。

しかし、普段の彼女とは全く異なる服装をしており、何に似ているかと表現するならば、魔法少女という言葉が最適だった。

呆然とする二人だったが、少女は続けて手に持っている鎌の様な物をゴーレムに向けて…

『Sealing mode・Set up』

フェイトの鎌から光の様な物がゴーレムに直撃する。

そして、ゴーレムの身体が徐々に崩壊する。
そして…

フェイト「ジュエルシード、封印!!」

『Sealing』

ゴーレムの身体が完全に崩壊して、その身体から小さな宝石が出現して、その宝石はフェイトの持つ鎌の様な物に吸収されていた。
もとの姿に戻ったフェイトを呆然とした表情で見ている上条当麻。

フェイト「当麻…今まで隠しててごめんね…」

悲しそうな表情で呟くフェイト・テストロッサ。

一方その頃、ゴーレムを倒された男は逃走していた。
そんな彼の前に、中学生くらいの少女が現われる。

男は少女を無視してその場を通り過ぎようとしていたが…

ヒュン!!

ドス!!

???「うつ…」

少女の一撃を受けた男はその場に倒れる。

真紀「全く…傍迷惑な『魔術師』ねえ」

結標真紀は一人で呟く。

真紀「それにしても…あの子が『魔道士』ね…まあ悪い子じやなさそうだから、別に放っておいてもいいかな」

少女は倒れた男を放置してその場から悠々と立ち去って行った。

第6話 フェイトの決意と当麻の歓迎会（前書き）

滝壺「はまづらが子供になった？」

絹旗「私がお姉ちゃんに超なるわけですね!？」

麦野「今なら簡単に殺せるか…」

主「麦野さんだけ物騒すぎますよ!」

麦野「あ!？」

主「ナンデモアリマセン」

フレメア「今の私ならはまづらと幼馴染にゃあ」

第6話 フェイトの決意と当麻の歓迎会

ゴーレムを倒した二人は八神はやてとアルフに合流して、はやてを自宅に送った後、上条当麻とフェイト・テストロッサとアルフの三人は少年の自室に集合していた。

当麻「…」

フェイト「…」

アルフ「…」

先程から一言も話さない一同。

沈黙がその場を支配する。

しかし、そのままでは埒が明かないのでアルフが口を開く。

アルフ「当麻には知られなくなっただけだね…」

当麻「二人は…一体…」

フェイト「私達はね…別の世界から来たんだよ」

当麻「別の…世界…？」

少年は少女が何を言っているのか全く分からなかった。

別の世界なんて存在するか定かでもない世界から来たというのだから。

それから、少女達は自らの正体を語り始めた。

フェイトが昼間見せた姿は、デバイスと呼ばれる道具を用いて変身した姿であるということ。

その姿になると魔法と呼ばれる力を行使できるということ。

ゴーレムの身体に埋め込まれていた宝石は、ジュエルシードと呼ばれるもので莫大な力を秘めているということ。

少女達がこの世界に来たのは、ジュエルシードと呼ばれる宝石を手に入れるためであること。

アルフは人間ではなく、フェイトが魔力で作り出した使い魔という存在であること。

唯一の一般人である少年にとって信じられないような話のオンパレードだったが、目の前で魔法を使った場面を見たことから少年は少女の言葉を疑う余地は無かった。

フェイト「ごめんなさい…私のせいで当麻を巻き込んだじゃって…」

突然、少年に謝罪の言葉を述べる少女に少年は困惑する。

少女が謝る必要など全く無いのだが、一人で全てを背負い込みがちな少女は少年に謝らずにはいられなかった。

当麻「フェイトは何も悪くなんてないよ。それにフェイトが助けてくれたおかげで僕はここにいられるんだから」

フェイト「…」

当麻「それより…どうしてフェイトはジュエルシードを集めているの？」

少年は少女が世界を超えてまで、ジュエルシードを集めることがどうしても理解できなかった。

お使い感覚で世界を超えられるようなことなんてあるはずもない。

だからこそ、少年は少女がそこまでの理由が知りたかったのだ。

フェイト「それは……」

アルフ「フェイト……」

当麻「どうしても知りたいんだ……駄目かな？」

フェイト「私は……お母さんの為に……」

当麻「お母さんの？」

アルフ「フェイトの母親がジュエルシードを必要としていてさ……フェイトはその為にジュエルシードを集めているんだよ」

当麻「そうだったんだ……」

まだ幼い子供で世界を渡らせてまでジュエルシードを集めさせるなんて普通はありえない。

心なしかフェイトの母親のことを語るときのアルフの表情が少しばかり暗かった。

当麻「フェイトはこれからもジュエルシードを探し続けるの？」

フェイト「うん」

強い決意を秘めた目で少年の言葉に答える少女。

しかし、どこかその瞳は哀しげだった。

上条当麻という少年はそんな少女の話を聞いて一つの決意をする。

当麻「僕にもジュエルシードの搜索を手伝わせてくれないかな？」

フェイト&アルフ「え？」

予期しない少年の言葉に少女達は動揺する。

家事や宿題を手伝うといった生易しい問題ではないのだ。

先程のゴーレムの戦闘を体験している少年が、ジュエルシードを集めることの危険性を理解していないわけではないのだ。

それなのに、目の前の少年は二人を手伝うと申し出てきたのだ。

フェイト「だ…駄目だよ！当麻は魔法を使えない一般人なんだよ！？」

アルフ「そ…そうだよ！」

二人は少年の申し出を断るが…

当麻「お願い」

頭を下げて二人に頼み込む上条当麻。

短い間ながらフェイトとアルフは、この少年は一度決めたことを絶対に曲げないほど頑固であることを熟知していた。

フェイト「分かった…でも絶対に無茶しちゃ駄目だよ？」

当麻「うん！」

嬉しそうに喜ぶ少年の姿を見て、苦笑いするフェイトとアルフ。正直言つて、ただの一般人である少年にジュエルシードを見つけれれるとは思わなかった。

しかし、危険を承知で自分に味方してくれる少年の気持ち無下にすることなど少女達に出来なかった。

一方その頃、自宅で図書館から借りた本を読んでいた八神はやては…

はやて「あの時の上条君かつこよかったな…」

思い出すのは昼の出来事。

初めて会った時はどこか頼りない印象を抱いていたが、ゴーレムと対峙した際に見せた強い決意を秘めた表情。

身を挺してまで自分を守ってくれた少年の事を思い出すたびに、少女は顔が赤くなるのを感じていた。

翌日、上条当麻は浜面仕上と共に翠屋の前に居た。

本日は、上条当麻の歓迎会が行われる日だったのである。

当麻「ここでいいのかな？」

仕上「とつとと入ろうぜ！」

カラン！

勢い良く扉を開ける浜面仕上。

店内は少年のクラスメート達で埋め尽くされていた。

呆然としている当麻だったが、少年の下に一人の女性が近づいてきた。

桃子「あなたが上条君ね？」

当麻「は…はい…上条当麻です…」

桃子「そんなに緊張しなくてもいいのよ？私は高町桃子。なのはの母です」

当麻「高町さんの…」

仕上「とつとと座ろうぜ上条」

いつの間にか席についていた浜面仕上が上条に手を振る。
桃子に促されて席に着く少年。

そんな少年の下にケーキを持ったなのはが近づいて来た。

なのは「上条君。いらっしやい」

なのはにケーキを渡される当麻。

当麻「あ、ありがとう高町さん」

なのは「どういたしまして」

ケーキを渡されてなのはにお礼の言葉を述べる。
そして本日の進行役であるアリサが…

アリサ「全員に行き渡ったわね？それじゃあ上条の歓迎会を今から行っわよー！」

アリサの言葉に同意するクラスメート達。
そして、一斉にケーキを食べ始める一同。

仕上「やっぱりここのケーキは超うめえー！！」

ケーキにがつく浜面を見たアリサは…

アリサ「あんた…もうちょっと丁寧に食べなさいよ…」

すずか「あはは…」

呆れるアリサと苦笑いするすずか。

ケーキを食べている最中の当麻に一人の男性が近寄ってくる。

士郎「うちのケーキは美味しいかな？」

当麻「とても美味しいです」

士郎「喜んでくれているようで何よりだよ。私は高町士郎。なのはの父親だよ」

当麻「今日は本当にありがとうございます」

士郎「かしこまらなくていいんだよ。そう言えば君はどのあたりに引越したんだい？」

上条当麻が海鳴市の何処に住んでいるのか聞いていなかったクラスメートは、その話に耳を傾ける。

当麻「僕は…」

海鳴市のとあるマンションに住んでいると告げる上条。

士郎「なるほど。そう言えば君のご両親も海鳴に来たばかりだろう

？ご両親のケーキも用意しようか？」

当麻「両親は…」

少しばかり暗い表情になった少年は両親がいないことを淡々と語り始める。

少年の話を聞いた一同は驚愕していた。

クラスメートも上条の両親が居ないことは知らなかったらしく、呆然としていた。

高町士郎と高町桃子も沈痛な表情をして…

士郎「すまなかったね…辛かったろう…？」

当麻「いえ…それに…」

桃子「それに？」

当麻「皆のおかげでそれほど辛くないんですよ」

海鳴市に訪れるまでは少年の味方は両親だけで、常に周囲の人間の悪意に晒されてきたのである。

しかし、海鳴市では少年を傷つけるような人間はおらず、むしろ心優しい人ばかりで少年は確かな『幸せ』を感じていたのだ。

士郎「そうか…」

静まりかえった店内だったが、突如浜面が…

仕上「おい上条！早くケーキ食わないと俺が食っちまうぞ！」

当麻「は、浜面！？ちょっと待って！？」

浜面の突然の行動に焦る上条。

周囲の人間はそんな彼等のやりとりを聞いて、笑い出した。
再び明るい雰囲気を取り戻す店内。

ケーキを食べ終えた上条は…

当麻「あの…このケーキを三つ頂いてもいいですか？」

桃子「ええ…どうぞ」

当麻「ありがとうございます」

上条当麻の歓迎会が無事終了して、クラスメートはそれぞれ解散した。

後片付けを手伝う高町なのはは、初めて少年に出会ったときの違和感の正体を理解した。

少年が時折見せた寂しそうな表情。

それはかつて、高町なのはが一人だったときと酷似していたのだ。
しかし、少女は少年の様に大切な人を失ったわけではない。

少年と少女には決定的な違いがあった。

当麻は自宅に向かう前に八神はやての自宅に向かった。

ピンポン！

はやて「はい」

扉を開くはやては当麻の姿を確認する。

はやて「上条君？どないしたの？」

当麻「ケーキ貰ったんだけど、良かったらどうかな？」

はやて「ええの？」

当麻「うん」

はやて「おおきに！」

喜ぶはやてを見て微笑む少年。

当麻「それじゃあ僕はこれで」

はやて「ありがとな…あ！」

当麻「どうしたの？」

はやて「上条君。明日図書館に来れるか？」

当麻「行けるけど…」

はやて「弁当作ってもええか？」

当麻「いいの？」

はやて「ケーキをくれたお礼や」

当麻「ありがとう」

約束をして自宅に向けて移動する少年。

帰宅した少年は、フェイトとアルフを誘って本日翠屋で貰ったケーキを食べた。

アルフ「滅茶苦茶美味いよこれ!!」

フェイト「うん」

ケーキを頬張る二人を見て、少年はこの幸せがいつまでも続けばいいと願っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3166y/>

とある魔法少女と不幸な転校生

2011年11月24日12時07分発行